

冥王星

ある日突然

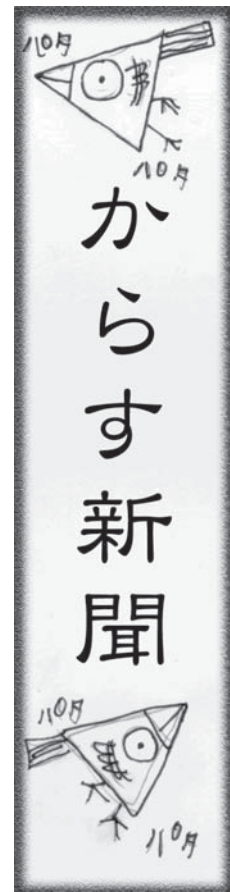
準惑星

君と僕

ある日突然

準人間

ブラックホール
明日は我が身の
順番待ち——特派員 Y



第8巻第12号
通巻第96号


発行所 東京都杉並区成田東4丁目3番4号 〒166-0015 ©からす新聞本社

からすホームページ <http://www.go-karasu.com/>

投書・お問い合わせのE-mail : colors@go-karasu.com

今日の紙面から

二面(建築)
建築とランドスケープ
三面(からすライブラリー)
DVD『ミドリ・ライヴ』
(英語)
いつでも頭大文字単語



暮れになると、何とはなしに忙しない気がする。実際には格別用件が立て込んでいたりするわけではないのに不思議なことだ。

こんな気になるのは、寒さの所為でもあるかもしれない、などと思う。仮に、ここが常夏の青空と太陽の下にある町だったとしたら、そんなにせかせかと小用に追い回されるような気分になりはしないのではないかと。浜辺で毒々しい原色のカクテルにストローをさばつとさして、へらへらと軽い酩酊の中、転た寝を繰り返す毎日。暮れに日々が磨り減るという印象を持つこともなく、年が明けてしまつてから、オー・ベイビー、もう新年になつてしまつたのかい、ははははハッピー・ニュー・イヤーと乾杯……などと、勿論、これは幻想の中の凶に過ぎない。

理屈の上では、所詮、一日は一日。いつの日も一日には変わらない。けれども、三月辺りなら、一日は残りの三百日ほどの内の一日なのに、十二月ともなると一日は残り三十日の内の一日、残り十五日の内の一日、最後の一週間の内の一日。気がつけば、ああ、もうあと三日しかない、と着々と追い詰められ、こんなじゃ年内に片付かないよ、と舌

打ちしたりして。年が改まるという目に見えない締め切りにせつつかれていくという要素もあるか。

きちんとやるべきことをこなしただけの人にとつても、ただあたふたしてただけでろくに何も為さなかった人にとつても、この気忙しい直に終わる、実態の伴う伴わないはともかくも、愈々押し迫つた三十日、大晦日、それまでの慌ただしさが嘘のように静かな夜がやってくる。多くの人々が故郷を指して東京を離れ、突然、人口が大幅に減少する。道は空き、目に見えて空気が澄み、団地の広場や近所の通りを歩く人も驚くほど少ない。がらがらの表を歩けば、下駄の音が遠くまで響く、妨げる音が何もないから。

私にはいわゆる田舎というものがない。父の実家は阿佐ヶ谷だし、母のそれは中野の神明町だからである。それに対して、友人たちの多くは宇都宮だの大津だの、都城中の中之条だのといったイナカというものを持っていて、暮れになれば、それぞれがそれぞれの町に向かって旅立っていくのであつ

(最終面に続く)

からす新聞は××××が母体となつて、世界に文化と芸術を発信すべく発行しています。

誰でも自由に参加できます(無茶じゃない範囲で)。

近代の建築が喪失した強さについて、建築とランドスケープの違いを通して考えてみた。ランドスケープに比べて建築は脆弱ではなからうかという自虐的な感覚。自由な提案を求められたときに、建築は、ランドスケープのように自立性をもちつつ一般性や社会性をもちえる提案をできるのだろうかということ。ランドスケープデザインでは、計画の詳細が決まってなくても、ある種の合理性と正しさのそなわったデザインが可能ではなからうか。緑や木、石、水などの自然要素を相手に、成長や変化、組み合わせといったデザイン基盤が、客観的な説得力をもつように思います。そもそも公園や庭園など、ランドスケープデザインが対象とする空間には、計画されるべき機能がない。時間が



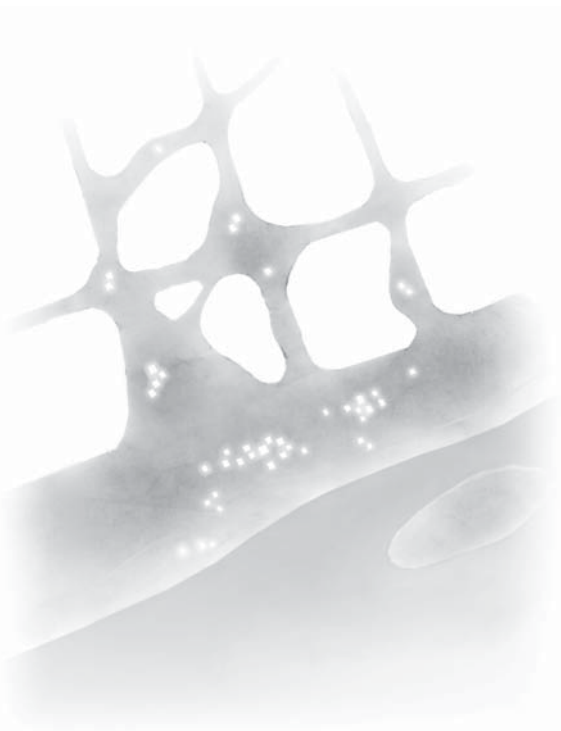
長い、自然を育む、機能がない。これはまったく建築の反対ではないか。短い時間を念頭に自然をコントロールし、機能を考えなければ成り立たない。建築とはいかにも人間社会がつくりあげる人為的なものなのです。コルビジエは住宅を「住むための機械」と言いました。近代建築は機能を大切にしたのです。時には近代建築イコール機能主義とさえ思われています。効率と経済。近代が通ってきた道筋が、建築にもはつきりと現れています。しかしながら、今、機能を考えないと建築の設計ができないような気もしています。設計者はよく、アクティビティとかプログラムと言ったりしますが、これも結局そこで何が行われるか建築が如何に使われるかということを考えてい

るのです。そここそ、建築のとうか近代建築の脆弱さが見え隠れしないだろうかということ。建築はそれを如何に使い管理するかで、まったくその生命力が異なります。ある理想の仮定に基づいた建築とプログラムを提案しても、使う人々の要求に合っていないとか、あるいは使う人の身の丈にあっていないければ、まったく用のないものになってしまうということもありましよう。単なるハコモノになりましよう。一方、このように考えるのではなく、建築の機能についてはあまり深く考えず、如何に使われようがそれは彼らの自由なこと、建築の強さだけを打ち出せばよいという考えかたもあるでしょう。この方向に魅力を感じないことはありません。もしかすると正しいや

方かもしれません。近代はるか以前、古典主義の建築は、機能でなく幾何学的な形式がデザインの規範でした。ある種の強さや逞しさは、時代背景や建築材料の制約だけではなく、このような自立した形式性のなかにあるのでし

う。いま、古典主義の時代に戻ることはできませんが、機能から離れた自立的な形式をもった建築が考えられるはず。それは、逞しい自立的な自然のような建築をつくることにつながるのかもしれない。建築をつくるのではなく自然をつくる。このように考えればすつきりもします。

(篠崎健一)





2005 SUMMER to 2006 WINTER LIVE!!

ミドリ
円盤、2006年

 DVDs

『円盤』から出てきたこのDVD-Rは、演奏も粗ければ、撮影も粗い。録音だって粗い。だが、しかし、それでも是が非でも一聴一見願いたい。百聞は一見に如かずってね、と、こんな在り来たりなことを申し上げる。本当にオルタナティブなバンドが漸く日本にも出てきたんだよ。音楽好きの諸兄、ぼんやりしていいのかい？

(全太)

ミドリって良いよ、とあちこちで触れ回るようになって、随分経つ。けれども、私の周囲では特段の評価、同意は得られず、今日に至る。確かに、セーラー服でパンツが見えるを厭わず、歌詞にも戸惑わずを得ぬような部分が無きにしもあらず、うおーという叫びを大きな音で聴くのは家族の手前憚られ、などという、とつきにくさ、ある種の抵抗が存在するであろうことは否定しない。けれども、けれども、けれども。



Karasu といえば、 からす新聞。

I wonder if He vomits.

「神様ってゲロ吐くのかな」

文中にあるのにHが大文字の**He**は、「神は」であり、不特定多数の「彼」とは区別される。これはつまりキリスト教国言語の英語を操る人たちの共通認識として、「彼」の代表、というか、最も典型的な「彼」と言うか、それが「神」ということなんだろう。同じように**Law** (法律) は「モーゼの十戒」、**Promised Land** (約束の地) は中東の「パレスチナ地方」である。

文中にあるのに頭文字が大文字、というのは、上のように、仲間内ではみんなわかる、という前提のもとに成り立つ。例えば家族内で**Father** = my father とか、ロンドンっ子の言う**Zoo** = London Zoo とか。これはつまり普通の名詞(代名詞)の固有名詞化だ。

聖書系以外で全英語国民に通用する「いつでも頭大文字」はあるだろうか。**Bridge** は、ロンドンに橋が一本しかなかった昔の「橋」。ただし2本目が架かって以降、他と区別するために the London Bridge になった。伝統ある特別な橋だから、固有名詞として B は大文字のままだ。でも、結局は地名なんて、なんか当たり前。

地名、人名など以外で次の二つはどうか。

- 1 Fortune (富、財産、運)
- 2 Prohibition (禁止)

ヒントを言うならば、**Fortune** は擬人化されていて、**Prohibition** は **Prohibition Law** とも言われ、つまり法律である。

Prohibition was a gift from **Fortune** who had seen **Him** vomit.

「**Prohibition**は神様がゲロ吐くを見た**Fortune**からの贈り物よ」

- 1 運命の女神。
- 2 禁酒法。

禁酒法はアメリカだけの話ではあるけれど、影響力の大きい超大国のことだし、小説や映画などで世界中に知れ渡っていることでもあり、ということか。裏を返せば、アメリカ人が **Prohibition** = 禁酒法と言ってるんだから、ほかの国も従え、みたいな傲慢さも感じなくはない。他のアメリカ史上系では、「内戦」を意味する **Civil War** は「南北戦争」。アメリカ史上に大きなインパクトを残した唯一の内戦だから、いちいち South-North とか付ける必要はない。内戦数知れないイギリスではどうかというと、アメリカにおけるほど際立った一つがないためか、やはり **Civil War** はアメリカの南北戦争ということで認知されている。**Revolutionary War** は「(アメリカのイギリスからの) 独立戦争」。

(望月)

(二面から続く)
 た。小学生だった頃、すっかり人気の少なくなつた中央広場でボールを蹴りながら、自転車で乗りながら、ブランコを漕ぎながら、聞いたことのない食べ物のあるイナカ、判じ難い言葉を喋るおじさんやおばさんや大小のいとこたちがたくさん集まってくるというイナカ、お年玉をたくさんもらえらるらしいイナカ、ご飯を食べる時の席順が明確に決まっているイナカ、冬休みが終わると担任の先生にイナカはどうでしたかと尋ねられるイナカ……イナカってどんなところなんだろうなあ、と漠然と空想を膨らませていた。少し羨ましいような気がしたものだ。そうこうするうちに冬の陽はとっと沈み、深閑とした宵闇の中、家に戻り、テレビを眺める。あまり面白い番組はやっていない。

半世紀近くも生きてみると、田舎というものがどんなものなのか、少なからず想像できるようになっており、羨ましさなどというものは、もはや微塵もない。田舎がないおかげで移動せずに済むのがあるが、移動したいと思う。暮れから正月は道ががらがらで車をびやーびやー走らせられて快適だし、などとも思う。近所が静かなのも清々しいと思う。酔っぱらって空を見上げればいつもよりたくさん星が見えるのが御機嫌だぜ、などと思う。このすつからかんの東京、この時期のこの町が何とも言えず好きで私である。いつも田舎に帰ってしまう人々はこんな東京を知らないだろうな。そして、これが俺にとつてのイナカなんだろうね、と。

私の暮らすこの団地も、いずれは再開発されることになるらしい。仮に、そうなった場合、工事期間の数年はここを離れざるを得ぬことになる。勿論、完成後には戻ってくることになるのだけれど、その時、私は今と同じ気持ちで、ここが俺のイナカなんだよな、と思えるだろうか。わからない。
 記憶というのは存外強固なこともある。けれども、時として、自分に都合の良いように無意識の裡に書き換えが進んでしまうこともある。そんな曖昧な、もやもやとした。
 「インファント・アイズ」を聴いている。忙しい忙しない忙しないと言いつつ、その実、忙しいのは口先ばかり。のんびりと深沈と更ける冬の夜を過ごす私。私のイナカはどこですか。この暖房の効いた部屋、ショーターが流れ、猫どもが走り回る、此処ですか。
 (全太)



Ken-ichi Shinozaki,
architect

Voice : +81-3-3220-0644
 Facsimile : +81-3-3220-0640;
 e-mail: geta-s@t3.rim.or.jp
 篠崎健一アトリエ



万年筆なら dani

<http://danijapan.com/>

bar&kitchen kanna

お一人でも気軽に楽しめる、食事のできるShotBarです。ビール、バーボン、焼酎からカクテルまで、豊富なお酒と、季節の素材を取り入れた手作りのオリジナル料理を、4/500円〜と手頃な料金でご提供いたします。

木とテラコッタを基調にしたギャラリー風の店内は舞台スタッフの手作り。ぬくもりの中に遊び心が溢れ、くつろげます。作品の展示、音楽、演劇等のイベントも企画スペースの提供も行っておりますので、興味のある方はご相談ください。各種パーティー、打ち上げにも最適です。

編集後記
 からす新聞第八巻第十二号(通巻第九十六号)、無事、発刊できました。
 新聞に限らず、これからも新企画目白押しなので、みなさんの御協力をお願いいたします。御意見・御要望をぜひお寄せ下さい。
 次号発刊予定日は二〇〇七年一月二十五日です。編集協力者、特派員記者、及び、投稿を熱烈にお待ちしております。

